10月19日
2016年
(平成28年)
水曜日
第18695号(日刊)
土・日曜・祝日は休刊
Metal & Technology
鉄鋼新聞

新社長

扶和メタル 勝山 正明氏

意気込みだけは負けない

まず足元見直し各支店をさらに強化

「大きな重責。身の引き締まる思いだ。だが、自信はある。意気込みだけは誰にも負けない」と抱負。

黒川友二前社長（現相談役）は専務時代を含め、40年以上実質的な経営トップとして鉄スクラップ業界大手の同社をかじ取りしてきた。「期待に応えられるよう、100年以上歴史に恥じないよう」と重責を感じながらも、「やりがいがある」とし、持ちいく。

前の気力と行動力で前社長と社員の期待に応えていく。

社長交代に伴い、役員体制も一新した。平均年齢は10歳若返った。また、黒川前社長から注文されたのは「10年先を見据えること」「つねに職場を綺麗にしておくこと」「社員を大切にすること」だけ。黒川氏は「古いレールを行くのではなく、新しいレールを敷くように」とも話しており、勝山新社長体制の下、扶和メタルは新たな道を進んでいく。

勝山社長の転機となったのは、95年に開設した鉄スクラップヤード「市川支店」の撤退問題。鉄鋼不況に苦しむ中、98年には「市川支店を閉鎖し、関西圏に経営資源を集中する」という案が決まりかけていた。勝山氏は当時役員ではなかったが、支店長として撤退の可否を決める役員会に出席。「せめてあと1年はやらせてほしい」と継続を嘆願し、支店継続が決まった。その後、赤字だった市川支店の業績は回復。02年には全支店でトップの業績となるまで成長した。

現在の同社は関東圏の売り上げが関西を上回る。勝山社長だけでなく、扶和メタルにとっても大きなターニングポイントとなった出来事だった。「いま、その当時を思い返している。やる気だけは負けないようにしたい」。

今後の投資案について「コスト低減・省エネ・合理化につながるものは、すぐにも実施する。ただ、これまで国内外で拡大路線を続けてきたので、まずは足元を見つめ直し、各支店をなお一層強くしたい」とし、いまの基盤を固めながら、新たな投資を模索する。

勝山社長としての新たな取り組みのひとつは、「社員アンケートの実施」。「肩肘を張ることなく、優秀な役員・スタッフの協力を得たい」と、社員一丸となれる体制づくりを進めていく。また、人材育成にも注力する考えで、「少数精鋭が当社の特徴。人間を強く育てたい」。

趣味はゴルフのほか、前社長の影響もあって車も好む。

（宇尾野　宏之）

略歴

勝山　正明氏（かつやま・まさあき）86年扶和メタル入社。95年市川支店長、09年専務。65年12月生まれ、大阪市出身。